



文武両道



学 校 長 水 穴 再 喜

翠巒体育会の皆様には、平素より本校のスポーツ活動振興のため多大な御尽力をたまわり、心より感謝申し上げます。お陰様で本校も、年を追うごとにスポーツに学習に発展の一途をたどっております。

さて今回、「翠巒体育」に寄稿の機会を得ましたので、常日ごろ職員・生徒に申しております私の所懐の一端を書き記して、会員の皆様の御理解と御協力を頂きたいと思っております。

高校教育の原点は何かと考えます場合、私はそれを「文武両道」の四文字に求めたいと考えております。いみじくもこれは、高崎中学・高崎高校と九〇年になん

ともでもありません。中曾根総理・福田元総理を初めとして、本校の輩出した学者・政治家・芸術家はその数を知りません。

また、運動面におきましては、翠巒体育会の輝かしい歴史そのものが何よりも雄弁に「武」の道の成果を物語っております。眼を転じて、昭和59年度の高々の「文武」の高まりを眺めて見ましよう。

「文」の精華たる生徒の進路先を次に記してみます。北海道大4・東北大24・東京大8・一橋大3・東京工業大6・京都大6・早稲田大89・慶応大44・中央大50・明治大58・上智大13・法政大18・立教大19・東京理科大52・同志社大5・立命館大3等々であります。これらの実績は、県下随一といつてよいでしょう。

次に、「武」の精進の程を見てみます。5月に行われた県高校総体では、高々は

総合第二位という成績を収めました。ラグビーは劇的な逆点優勝を飾り、陸上は一位二種目・二位一種目でその中には走幅跳の大会新記録も含んでおります。その他、各部とも母校の名譽をかけて大いに健闘致しました。また、秋田で行われるインターハイには、陸上で2名(一五〇〇M・五〇〇〇M・走幅跳)、硬式テニスで2名(ダブルス)が出場致します。

このように本校は、県下随一の進学校であると同時に、県下有数のスポーツ校でもあります。誠に、「文武両道」ここに極まれりといった感が致します。広く全国を見渡しても、高々のような高校は極めて少数であります。なるほど、一部の国立大付属高校や私立高校の中には「進学校」の名を欲しいままにしている高校があります。しかし私は、寡聞にしてそれらの高校がインターハイで大活躍をしたという話を耳にしません。また、実業高校や私立高校でスポーツに強い高校は沢山ありますが、それらの高校が進学校という訳には参りません。本校は、このように「文武両道」の道を求め、実践し、そして成果を上げております。では

なぜ、それ程までにこの「両道」を窮め続けなければならぬのか。以下にその点について少しく信ずるところを記してみます。

知育・徳育・体育ということが教育関係者の間で云々されて久しいものがあります。なる程、生徒の健全な成長にとって、知・徳・体の教育は必修なものであります。しかれば、いかにしてこの三位一体の教育を一人一人の生徒に施せるの



全面改築が予定される翠巒会館

か。私は、そこに「文武両道」の求道の必要性を見るのであります。すなわち、知育と体育を充実させ、一人一人の生徒が学問に打ち込み運動に汗すれば、徳は自から備わると考えるのであります。たつた一題の数学の問題を一時間も二時間も考え続け、また夏の炎天下に汗と土にまみれながら友と練習の苦しさを分か合おう。ここに徳育がなくてどこにありましようか。私が知育と体育の両道の大切なことを主張する所以であります。

諸先輩が営々として築き上げられた高々の伝統の上に、我々は新しいページを書き加えつつあります。毎年毎年「伝統」という名の書物のページは新しくなりますが、そこに流れる筋は一貫してあります。それは、「文武両道」であります。

稿を終るに当り、会員諸賢の御健康と御活躍を心よりお祈り致します。

(S 59盛夏)

野球の思い出



同窓会副会長

柴 山 大五郎

ただ今、甲子園への出場を巡って、各地で予選がたけなわである。私は、小学校二年頃キャッチボールを兄に教えられ、三年位になって野球のルールが分つて来た。面白くてたまらずこんな魅力的なものには他に無いような気がした。当時の世相としては、派手な格好のよいユニホーム、きびきびしたプレー、打球の快音、それに対する応援のすさまじさ、野球の選手は童心のあこがれの的であった。兄にせびつて、高崎中学や高陽クラブの野球の試合には一緒にいった。ある時、前橋中学との試合があった。新前橋まで汽車で行き、石倉を通って利根橋を渡るとすぐに前中があった。私は、大きな中学生の中に混って、遅れないように一生懸命歩いた。この試合が定期戦であったか、いずれが勝つたか忘れたが、すごい応援合戦で興奮のつぼと化した。事をよく覚えてる。また、ホームベースの後に大きなけやきの木があり、高中の捕手が格好よくシングルで球を受けていたのを覚えている。けやきの木は、今も群馬中央総合病院の庭にあるようだ。

私が六年の時、関東大会の決勝で桐生中学に一点取られて甲子園出場の機会を失った事があった。この試合で、ホームベースのジャッジが不正で負けたというので問題になった。金子写真館のウイン

ドーにこの劇的瞬間が飾られ、一層高中生に永野清己君がいて、夕べ高ちゃん帰って来て種々話を聞き悔しくて家族皆で泣いたと翌朝聞かせてくれた。私もその話を聞いてぶ然とした事を、今頃になると思ひ出す。清己君は私と仲が良かった。卒業後、専修大学でも投げていた。高ちゃん、清己君の次兄で五歳違い（高己・27回）。名捕手であったし、人格者であったので、私は特に尊敬していた。共に故人になったのは残念である。スポーツは、勝負を度外視してそう快な思い出を残す。後輩の諸君、しっかりとやって下さい。（S 59・7）

同窓会からの言葉



同窓会副会長

小 山 禎 一

今年も7月に入ると、猛暑と共に例年通り甲子園の季節がやって来ました。母校は残念ながら前橋高校にコールド負けを喫したが、最後まで頑張った選手諸君の真剣な姿に心から敬意を表す次第です。今年には更にアメリカのロスアンゼルスでオリンピックも華やかにオープンし連日TVで実況放送され、正にスポーツの夏

といった感があります。「翠巒体育」第八号が発行されるとのこと、毎回毎号、素晴らしい企画で楽しく拝見させて頂いております。当初、戦後卒業した若い人達が中心となって翠巒体育会が発足すると聞いた時、同窓会が二つ出来てしまつてやりにくいのではないかとちよつぱり不安でした。しかし、こんな心



完成したトレーニング室

配は取越苦労でありました。同窓の先輩は後輩のひたむきな純真さに心から応援し、また後輩の諸君は先輩の意見をよく聞いて下さつて車の両輪のごとく素晴らしい活躍をされ、高々同窓会の今日の活動に大きな活力を注入して下さいました。どこの学校の同窓会でも共通の悩みは総会に若い人達の出席が余りなく高齢化し老人クラブのごとき感がする傾向にあります。高々同窓会の総会は若々しい明るいにぎやかなムードで楽しい会になつておりますのも一つには翠巒体育会の皆さんの御協力であろうと思われま

す。同窓会も、近く九〇年を迎えようとしております。九〇周年の記念行事を行う事が常任理事会でも決定されております。翠巒体育会が中心となつて、今までの様な祭典でなく、躍進する若き高々を象徴するスポーツ的な祭典が行なえないかと思つたのは私一人ではないと考えます。

(S 59・8)
(42回・美峰酒類(株)社長)

更に栄えあれ



P T A 会 長

長 野 幸 國

最近、母校に接する機会が多くなって、今まで気付かなかったり当然のことと思っていたことが実は他に類を見ない実績や組織、或は設備であることに気が付き、今更ながら高々の伝統と力に驚かされま

す。その一つが、「翠巒体育会」の存在です。一〇有年前より運動部OB諸兄が、それまで独自に活動していた各部OB会の統合と活性化、現役の強化と助成、更に各部OB諸兄の親睦を目標に、善意と情熱をもってただひたすらに母校運動部を応援してきた姿、「翠巒体育会」は、その先見性とユニークさで高校としては全国唯一の存在と自負してよいのではないのでしょうか。

青少年育成が世界的に急務といわれて久しい現在、高々では知徳体三位一体の教育が実践され、大学入試では県下でも群を抜き、社会問題になる事件何一つなく、更に県高校総体二位が指定席である等、バランスの取れた実績の素晴らしさは、校長先生始め諸先生のためまぬ御努

力の結果であることはいうまでもありません。そしてまた、同窓生諸兄の「母校を思う心」の賜物でもあると思います。スポーツ有名校は数多くありますが、おむねは何か一つだけ有名なのです。ところが高々は、すべてのスポーツにバランスよくハイレベルを維持しながら、時あらば皆全国をねらう。この高々のス

高校野球の審判



若 山 享

近頃、学生野球、特に高校野球が、一つの「型」にはめられていくような気がしてならない。その事は、特にメンタル

な面で表われている。演出者は審判であり、表現は「高校生らしさ」である。一例をあげると、昨秋の秋季関東高校

ポーツのあり方は八〇有余年の伝統の上に培われたものでしょうが、近年ではその理念が「翠巒体育会」に引き継がれその活性化に貢献してきた実績は大きく評価されています。

私は時々、「高中・高々・母校」を出し過ぎておしかりを受けます。「翠巒体育会」の場は、一同窓生として、またバスケット部OBとして、誰に気兼ねなく大声で「母校」をうたい上げてもよい場だと信じています。

以上、PTA会長として、「翠巒体育会」諸兄の「高々を思う心」に感謝申し上げると共に、母校を取り巻く「翠巒」の如く常に清々しく母校を見守って頂き今後共限らない御声援をお願い申し上げます。(S9・8)

(49回・バスケット部
株長野代表取締役)

野球県予選最終日、桐生球場で決勝戦と三位決定戦が行われ、結果は前工、農二、前高の順で県代表が決定した。私は、三位決定戦の前高―高々戦をスタンドで応援していた。五回に高々の三塁走者が本塁へ突入、タッチアウト。こ、でアクシデントが起きた。前高の捕手が左手をスパイクされ負傷退場(手の甲を三針縫うけがで全治一〇日間)。この時球審がラフプレーと判断、大声で走者を叱責した。私はこの球審の判断に疑問をもった。ところが、さらに翌日の上毛新聞でも、「県高野連ではこのプレーを危険行為として高崎の部長・監督に厳しく注意した」と報じている。後日高々の田端稷野球部長(54回・社会科)に確認したら、高野連からの注意はなく誤報であったらしい。走者が故意に足をあげ無防備の捕手の顔面や身体を蹴ったのではない。一瞬のすきを突き股間にスベリこんだのである。負傷したのはミットをはめた左手の甲であり、負傷した捕手には気の毒だけれどタッチプレーの未熟である。ところが前記のごとくラフプレーの判断であり、取扱いである。そこにあるのは真の判定でなく、現象・結果に依る加害者と被害者としてとらえている。その根底には「高校生らしさ」の押し売りではないだろうか。たとえ高校野球といえども、毎日の習練の結果は試合に勝つことであり、またそれが甲子園の道につながっていくものと思う。

(58回・野球部
井上工業(株)高崎本社建築営業部長)

特別寄稿



スポーツ回顧 II

田島辰次

スポーツと傷害

体育は、心身の健全な発達を促す教育の手段である。しかし体育の中には、興味をそそり、勝敗により優劣を競うスポーツがある。昭和36年、「スポーツ振興法」制定に当っては、広義に体育やダンスまで含め身体運動すべてをスポーツとした。スポーツには必ずルールがあり、ルール内で勝敗が決められる様になっている。スポーツを見る機会は多くなり、時には両者優勝にして欲しいと思われ、好試合があるが、無情にも時間や回数を延長しても勝敗を決する。

スポーツを愛好する者は、練習過程が尊いといわれるが、究極においては勝ちたい。だから、普段の練習においては無理があり、時に傷害が発生する。病気にもなる。

自己を回想する時、中川小学校三年でスポーツが好きになり、よく走り跳び、対抗試合には引率されて近隣の学校に出掛けた。昭和2年、五年生の秋に心臓弁膜症になり、医師より激しい競走は不可

と宣告され、走ることの少ないジャンプのみを楽しんでおった。それ故、高崎中学校に入学し先生に陸上競技部に入る様に勧められたが、母親の注意を守り、四年生で入部し相変らずジャンプのみの練習であった。

東京高等師範学校に進学、全日本の上位を競う東京文理科大学陸上競技部は部員60名、全国に名をはせた猛者の中へ地方出身の未熟者では何としても練習を人一倍しなければならぬ。寮生活二カ年、朝夕の砲丸投やジョギングは日課であり、火・木・土曜の合同練習は上級生に絞られた。二年生の夏は、千葉県館山の水泳訓練に参加しなければならぬ。出発前の一週間は校内のプールで基礎訓練をして参加したが、陸上競技部員も気の合った者が15名位参加していた。朝夕陸上のトレーニング、日中は午前三時間、午後三時間というハードスケジュールであった。一〇日間の海水訓練は真黒で健康そのものであり、帰郷するや7月下旬は高中の指導に毎日出掛けたが、何となく体の調子が悪い。医師に診察してもらったら湿性肋膜炎と診断され、水を

取り、安静と栄養を取る様に申し渡された。この結果、文理大の夏季合宿は不参加、二期は休学する予定であった。9月に上京した時には高師の先生もびっくり、「休学届が出ているが」といわれたが、見学を条件に授業に参加しておった。栄養を取り左胸湿布を続けて調子のよい時に練習する不利な条件の中で、四年生の時に全日本学生大会で走幅跳優勝・三段跳二位の成果を得た。

東京オリンピック返上と共に急ぎ徴兵検査を受け、第二乙種といわれた。理由は、左胸部の肋膜炎が完治していないとのこと。徴兵官に頼んで第一乙種となり、昭和14年1月入隊したが、一週間の病院検診の結果即日兵役解除を申し渡された。しかし、一週間入隊しておめ家や学校にも帰れないので、中隊長や班長に頼みようやく置いてもらうことが出来た。それがため、初年兵の時より保護兵として背囊(せいの)除きであり、幹部候補生になっても同様であり、盛岡予備士官学校においても保護班に在籍した。盛岡時代、各連隊よりの幹部候補生の中で銃剣術や走る跳ぶはいつもトップにあり「何が保護兵

だ」といわれた。胸部疾患は、一朝一夕には治らない。栄養と節制に注意し、辛抱強く努力せねばならない。本当に健康になったと自覚した時は、昭和16年頃であり、将校として初年兵教育をしておった頃である。この間、約五カ年を要した。痕跡は現在もある。

戦後、三〇歳を過ぎて国体が開催され始めた。在野の昭和22年、23年は、合間をみて郷里の中川小で練習し選手となった。その頃より群馬陸協の役員となり、昭和24年に教員となったが、役員はそのままに強化練習の指導や自らも選手となった。昭和26年春、対栃木戦が高崎城南競技場で開かれ、三五歳で走幅跳・走高跳・三段跳に終日参加した。審判を兼ねての試合は生理現象を狂わせ、夕方簡単な祝勝会で一杯飲み小便をした所、真赤な尿であった。疲労物質位に考えておったが、後日校医に診断をお願いしたら軽い腎臓炎ではないかと告げられた。勤務は平常にしておったが、翌年7月脚気の症状が感ぜられ体育の授業に耐えられなくなり高崎・綿貫病院に入院、細密検診の結果は左腎臓特発性出血であり病院では処置なしとのことで、改めて群馬大学医学部附属病院に入院した。群馬大学の細診も同様で、出血は前年よりあり、左腎臓の切除か試験的な止血剤注入しか方法ないとのことであった。幸いにも、橋本助教の二度の止血剤注入により完治することが出来た。この治療は、夏というのに四一度以上の発熱に襲われ湯たんぽを二つ抱えて震えておった。同時に、ペニシリンのアレルギーにより、快癒後

全身の表皮は剝離した。病後、原因を推
理すると、前年春の対栃木戦に適切な放
尿をせず左脚踏切のジャンプばかり行っ
たからであると考えた。

今にして回顧するに、様々な病気をよ
く乗り越えたものだと思う。更に付言す
れば、四五歳の時、昭和36年の夏、県下
の青少年スポーツリーダー講習会を三泊
四日で六回実施指導した直後に吐血し、
意識不明のまま前橋赤十字病院に入院、
胃潰瘍で胃の切除を行った。自己意識の
強さと不節制が原因であったと思ってい
る。

スポーツは、第二回国体より第九回ま
で選手をやり、病氣も何とか回復し、昭
和46年、四五歳の関東七都県大会まで出
場してみたが、胃の手術は腹筋を痛め選
手となることはあきらめた。しかし好き
なスポーツのこと、立場もあり、国体は
第二回以来第二五回までに出掛けなかつ
たのは五回だけである。

合理的練習

高中の陸上競技部に四年生で入部した
が、上和田町の狭いグラウンドは野球部
と併用である。個人競技はウォーミン
グアップが早く出来るので、野球部が始
めるまでにトラック練習を実施し、硬球が
飛んで来る頃は短距離・投てき練習であ
り、最後は東側の砂場が練習の中心とな
った。

富田俊一先生(11回)に古い跳箱用
踏切板と頂き、走幅跳・走高跳の練習を
した。指導者がいないので本を見ながら

滞空時間を利用してフォームの研究をした
が、走高跳のスタンドの最上部は2mで
ありそれを目標に練習を重ねて、五年生
の時に踏切板を使用してフォームを完成
することが出来た。同時に、高中の陸上
競技部はジャンプの優秀者が続出した。
この廃品の踏切板利用の方法は、戦後
の私のジャンプ指導法の一つであった。
砲丸投・槍投においても、グラウンドが
十分利用出来ないで砂場を着点とする
スナップ練習があり、投てきの回数を増
大することが出来るので大いに利用した。
スポーツ全般に、腹筋の訓練は大切で
ある。この腹筋力の向上は、つらいこと
であるのでやりたがらない。東京高師に
入学すると、クラス対抗ボートレースが
海軍記念日(5月27日)に尾久で行われ
ることが分り、同級生とメンバーと組ん
で尾久の艇庫へ行きボート練習をした。
ボートを知っている者は、小樽中学校と
鳥取中学校出身の二人であった。山猿が
早朝ボート練習をするのは大変であるが、
このことが腹筋・背筋・腕力に非常に効
果があった。在学四年間、春は専らボー
ト練習をし、三年生の時は全学で優勝し
た。同時に、最終学年の陸上の成果とな
った。

冬になるとサッカー・ラグビーの全学
クラス対抗があり、三度出場し三年生の
時は念願の優勝を果たした。ラグビーの
スワークは蛇行運動であり、脚のキック
力を養うのに効果があった。陸上競技部
員は、冬はロードワークやラグビーによ
り脚力を付け、春のシーズンに期待して
おった。

高師中心の東京文理大陸上競技部は、
部則に「猛練習・団結・節制・闘志・犠牲」
の五項目があつて、シーズン中は禁酒・
禁煙であつたがよく守られていた。しか
し、三年生になる頃より文理大が弱くな
り不節制と喫煙が増大し始めたので、四
年生になろうとする時に規律違反者には
退部を願つた。個人競技においても団結
は大切なことであり、試合には予選を
実施し選手を決定したので、下積みの方は
犠牲心を發揮してマツサージや出場時間
への調整役を務めてくれた。文理大の競
技精神は現在まで踏襲しており、指導の
方針としておつた。

文理大陸上競技部時代の合同練習は、
火・木・土曜であつた。それ以外は自主
練習であり、グラウンドを持たなかつた
ので明治神宮外苑、芝公園、滝野川の東
京高等蚕糸学校と転々としておつた。三
年生になつて、保谷に三〇〇mのグラウ
ンドが出来た。片道約一時間であり、こ
の様な不利な条件で全日本に優位に立つ
ためには合理的な練習手段を考えなければ
ならない。そのための筋力補強に、朝
夕寝床で出来る柔軟運動、腹筋・大腿筋
の引上げ運動、腕筋の運動を実施した。
指導者として教えたことがあるが、実行
している人は少ない様である。

青森・大鰐の国体スキーに試合前日
到着して優勝した園部選手(当時法政大
学)に、東京におりながら「街路樹とア
ルペンのポールと見立ててキックター
ンの練習している」と聞いたことがある。
全く感心する不断の努力の結晶が実を結
んだのだと思う。スキーの話のついでに

もう一つ申し述べれば、名スキーヤーに
林和子という人がいる。大穴スキー場
で兄の林恒夫氏が指導しておつたが、それ
を見て感心したことは、一般スキーヤー
のゲレンデは使用せず難しい地点にポー
ルを立てて練習しておつた。滑り終れば
リフトは使用せず独力で登らせる。登る
ことは大切な練習であり、練習の一本・
一本を大切にしなければならぬ。いい
加減な練習では立派なスキー選手にはな
れない。かくて旭川国体は、他を断然引
き離して林選手は優勝した。ゴール直後
本県関係者は喜んだが、その中であつて
ただ一人不眠でしかつておつた人がある。
それは毎日新聞の記者であつた。なぜ二
秒早く出来なかつたか、記録が悪いとい
うことであり、その後林選手の海外派遣
は実現しなかつた。その毎日新聞記者
こそ彼女の夫となつた人である。

スポーツに強くなるには不断の訓練が
必要であることはいうまでもないが、も
っと大切なものは指導者の優劣にあると
思う。県内の学校や全国大会とテレビで
見れば判然としている。指導者の転任に
よつて強弱が移動している。指導者は、
理論を知り、経験を生かし、熱心な指導
と部員を引き付ける魅力が必要である。
更に、学校の環境と伝統も必要である。
現在、久し振りに母校のグラウンドを
見た時、完べきな状況にある。今後の飛
躍を期待して擲筆する。

(34回) 元高々教諭

元県総合運動場所長

兼県スポーツセンター館長

O B 会 の 活 動



「伊香保」で集う六九会

バスケット部

反町 定夫

バスケット部OB会では、毎年6月9日頃にOB会の総会を兼ねて六九会（ロキニュー会＝籠球、老球の意味もある）を開催している。

今年が始めての企画で、一泊でゆっくり若き青春の思い出を語ろうではないかとの意見により伊香保温泉の山陽ホテルで6月9日（土）に前夜祭、翌10日（日）に母校の体育館で本会が開催された。なお6月9日には、ゴルフ愛好者により赤城国際カントリーでゴルフ大会も盛大に行い、表彰式は夜の宴会の席上で取り行われた。

ゴルフ大会は、早朝7時30分集合で、終了が午後5時頃となり、すぐに伊香保へ直行という結果のため、前夜祭の集合時間はかなり遅れるハプニングとなった。しかし、夜の宴会及び終了後の語らいは楽しくすっかり青春時代に戻った感じとあり昔話に花が咲き、就寝したのは東の空が明るくなる頃であった人もいたという。（奥様方＝うちのパパ、夜は？なのに。）さて、翌日がまた母校の体育館というのであるから、参加諸兄の体力のある事

にはあせんとするばかりである。正に昔とった杵柄とはこの事か？ だが、夜に強い諸兄もさすがに体育館でバスケットのゲームを自ら進んでやるお兄様方はおらず、バスケットをやったのはやはり卒業後数年の若手OBであった。

なお、話が前後するが、六九会の参加者は30名余り、毎回種々の集りに出席してくれる人は顔触れがほとんど同じというのには我がバスケットボール部OB会だけかなあという疑問を持つ次第である。終りに、六九会の他に新年会・ファミリー会も開催しているので多勢のOB諸兄の参加方を要望しておく。（S59・10）（50回・不動産業）

O B 会 結 成 一 〇 年

陸上競技部

大田部 保

陸上競技部OB会が発足してから丁度一〇年になります。翠巒体育会の設立、その機関誌の創刊もほぼ同時期であり、共に歩んで来たといえるでしょう。

結成当時100名程だったOBも、昨年の名簿改訂では200名を越えました。監督に滝沢武司先生（保健体育科）が就任されてから七年になりますが、その卓越した

指導力により常に県下の上位を占め毎年欠かさず全国大会に選手を出場させております。今年は東京・青森駅伝に唯一の高校生として参加、大活躍し新聞をにぎわした黒沢君や関東大会走幅跳準優勝の武井君などがおり、一・二年生にも期待の星が目白押しです。こうした後輩諸君の頑張りにOB会としては物心両面において根限りの後援をする事が最大の仕事と考えておりますが、なかなか思う様には参りません。毎年合宿時にわずかな栄養費と関東大会以上の出場選手に餞別を上げる程度で、もつとしっかりした援助が出来ないかといつも気をもんでいる次第です。昨年は以前寄贈したテントが痛んだので新調して贈り、他の部からも「貸してくれ」といわれたりして部員達にも喜んでもらえました。この現役達が次々にOBとなり、自分達が面倒みてもらった事をして行く。お互いがそうしてOB

会の発展があるのです。今年から鈴木武夫先生（国語科）・加藤敦雄先生（英語科）が顧問に加わり指導陣も一層充実、また毎年沢山の部員が送り込まれてOB会総会も若い人が多くなつてにぎやかになりました。一〇年一区切り、会長もこの辺でバトンタッチし、若い人が意気と情勢で盛り上げて行く、生きの良いOB会にして行く様にもって行きたいと考えております。もちろん、会長を辞めてもOB会のために働かせてもらいますし、後輩達が一層の活躍が出来る様これからも一生懸命応援して行きますので、よろしくお願ひ致します。

（52回・柳川パーキング）

翠巒体育会 会計報告

昭和56年度

会 計 阿久沢 茂
監 査 東 秀和
監 査 大須賀 正臣
（51回・応援部）
（57回・陸上部）

収 入				支 出			
摘 要	金額(円)	備 考	摘 要	金額(円)	備 考		
繰越金	87,642		総会費	100,000			
年会費	220,000	20,000×11部	餞別費	38,000	関東大会出場		
総会費	115,500	10,500×11部	役員・理事会費	113,750			
機関誌広告費	75,000		機関誌費	350,000	第6号		
助成金	40,000	同窓会より	慶弔費	40,000			
理事金	100,000	5,000×18名	事務局費	62,381			
利息	90,000						
	6,307		計	704,131			
計	734,449						

差引残高 30,318円

翠巒サッカークラブ

サッカー部

赤羽 英光

今年もまた1月2日に高々グラウンドにて「初蹴会」を行い、サッカーの幕が開きました。初蹴会では現役一軍VS若手OB、現役二軍VS古手OBの試合が行われ、特に古手OBの珍プレー・迷プレーには拍手喝采でした。午後からは高松荘（高崎市高松町）にて50名余りのOB、30余名の現役が集まり新年会が開かれ、役員の改選、翠巒クラブ・現役の戦績発表等の後、昔話に花を咲かせながら盛大なうちに終わりました。

さて、58年度の翠巒クラブの戦績は次の通りです。

◇県三部リーグ（春季）（58・5〜7）
翠巒3——1古河鉱業



市民リーグ・決勝戦

翠巒 不戦勝 原研高崎

◇ 5——2 妙義クラブ

◇ 2——1 日本電子機器

◇ 不戦勝 南風クラブ

◇ 3——0 高崎市役所

◇ 天皇杯県予選

翠巒0——5 渋川クラブ

◇ 高崎市民大会

翠巒2——3 高工OB

◇ 県三部リーグ（秋季）（58・9〜11）

翠巒1——1 板倉クラブ

◇ 1——3 関南クラブ

◇ 1——0 高専サッカー部

◇ 1——5 高崎クラブ

◇ 2——6 太田クラブ

◇ 3——3 F.C. 明電

◇ 不戦勝 高工OB

◇ 2——4 子持クラブ

◇ 県選手権

翠巒1——1 古河鉱業 P.K. 勝

◇ 4——2 明電舎

◇ 0——6 前橋エコー

◇ 高崎市民リーグ

翠巒5——0 古河鉱業

◇ 1——0 高工OB

◇ 0——6 高商クラブ

◇ 2——3 高藤クラブ

また58年11月20日には、高崎浜川競技場にて高崎市民リーグ協会創立一五周年記念フェスティバルが開催され、市内13の少年チームを始め中学・高校・社会人チームが集まり、アトラクション・親善試合に一日サッカーを満喫しました。現在協会長には国峰善次郎会長（50回）が

就いており、当クラブも市サッカーの発展に一助を果しています。
（73回・三共電器棟八斗島工場）

OB会だより

山岳部

藤井 行雄

昭和57年〜58年

◇OB会総会（魚仲・高崎市九蔵町）

・現役の活動報告

・役員選挙

・詳細な名簿作り

◇高橋信男先生送別会

顧問高橋先生（国語科）が藤岡女子高校へ転勤されましたので、市内在住のOBが参集し、現役時代の懐かしい合宿の話等、夜更けまで語り合いました。

◇送別ゴルフコンペ（サンコーカントリ）

OB会第一回のコンペを開催。以後、継続して開催予定

◇合同追悼登山

裏妙義の遭難現場へ、一〇数年振りに、現役生徒と初めての合同追悼登山

（66回・棟藤井織維）



翠巒体育会 会計報告

昭和57年度

会計 阿久沢 茂

監査 東 秀和

監査 大須賀 正臣

（57回・陸上部）

収入				支出			
摘要	金額(円)	備考	摘要	金額(円)	備考		
繰越金	30,318		総会費	82,740			
年会費	225,000	25,000×9部	総会別費	60,000	関東・全国大会出場		
総会費	91,000	3,500×26名	マラソン大会補助費	10,000	6部		
機関誌広告費	175,000	25,000×7部	機関誌	500,000	トロフィー		
助成金	300,000	同窓会・サッカー部より	運動部顧問会議費	10,000	第7号		
雑収入	27,015		事務局費	30,000			
計	848,333		慶弔費	10,000			
			計	712,740			

差引残高 135,593円

翠巒育英会発足について

—経過を主として—

(財) 翠巒育英会常務理事

田 中 順

排球部の落ちこぼれの私が、まさか、「翠巒体育」に拙稿を掲載して頂けることは夢にも思いませんでした。一年先輩の国峯会長から、標記の事について書け、「一刻の猶予もまかりならぬ」とのきついお達しが舞い込んで参りました。長幼序を重んずる私達の年代のこと、先輩の言葉は千鈞の重みがあり、普段の呼称の「順ちゃん」が何故か「順さん」というのも無気味な口振りに断るわけにもいかず、埋め草になればと、いやいやながらも快諾せざるを得ませんでした。この様な訳なので、リラックスして書かせて頂きます。御容赦下さい。閑話休題。

どこの同窓会でも閉鎖性・排他性は好むと好まざるとにかかわらず持ち合わせているのが宿命でもあり、当然の事と思えます。疑問の余地はないといってしまえばそれまでですが、それで良いのでしょうか。この多様多相化し重畳する社会に、純系培養され、ひ弱な独り善がりの世界に閉じこもることは、動物実験の世界ではとも角として、所詮無理であることは先刻承知の事と思います。モラトリアム状態からの脱出は、人間の、団体の成長過程の一つのプロセスに過ぎません。

創立八八年、人間にしてみれば米寿を迎えた我が同窓会は、微温湯の甘えの中に浸っているときは既に過ぎ去りました。名門は名門なるが故の絶えざる努力が常に求められていはずです。慢性化された同窓会モラトリアム状態に抵抗し、光輝ある我が同窓会が自己定義を明確にし、社会的責任と義務を負う契機が訪れて参りました。

物事をなし遂げるには種々なる条件が必要だと思えます。地方公益法人の財団法人翠巒育英会の生みの親は、なんといっても待ちに待った三代の悲願ともいべき長き思いの甲子園出場にかけた地域、同窓の、学校の怒濤の如きエネルギーの奔出に尽きると思えます。その上に募金団体の筆頭であった小山禮一野球部後援会長(42回)の英断の賜でクラブ活動振興基金として同窓会への寄託がなされたことであり、へそ曲りにいわせれば、甲子園出場の野球部健児が最大の功労者であったともいえる。基金の運用については各部に分配しないという原則であったが、甲子園以後、全国大会出場部が続出し、各部が手許不如意から原則が累卵の危機に傾いた事も幾く度か。折も折、原

一雄同窓会長(29回)より同窓会の組織作りにつき、下命あり。本部幹事会にて定時制・通信制の同窓の方々と打合せ協議する機会を得て、現在の通信制の方々の並々ならぬ勉学に対する情熱と真しな向学心の発露を目の当りにしたこと。水穴再喜校長より予予うけたまわっていた向学心に燃えて新聞配達をしている高々生がいること。それ等がオーバーラップし、

核融合を惹起し、私の乏しい頭の中で核分裂を起すエネルギーが放出され安逸の貪りから覚醒して、徐々に奨学財団の構想が芽生えて結晶化して、同窓会の諸機関でお諮りし、時宣を得たこととして合意が得られ、支障のない限り実行する方向づけが承認されました。私ごとき弱輩が提案した案件につき、御理解と御支持を頂いた肉體年令を考えると、素晴らしい硬直しない頭脳を持たれ柔軟性と強靱な精神を持ち未来を展望する資質に富んだ会長及び常任理事の諸先輩に新たな発見をし深甚なる敬意を表わさざるを得ませんでした。高々の自由闊達の気風と進取の精神を改めて確認させて頂きました。

ゴーのサインが出て、一瀉千里にと思

っていた矢先き、事務長が病魔におかれ一頓座をきたしてしまいました。しかし、男子が一旦、心に決した事。猪突猛進は親譲り、年甲斐もなく指導書と首っ引きで県教委の指導を仰ぎ、起案し、修正を繰り返して申請し、異例の早さで昭和60年1月19日付で設立許可を頂けました。県教委では、横山巖教育長(38回)・小林真吾総務参事(56回)・中沢和雄主事(69回)に懇切な指導を頂けたことは僥倖であった反面、財団設立が嚆矢であるとして愛情溢れる厳格さで望まれたので途中投げ出したくなった事も告白しておこう。

人口動態統計特殊報告・全国母子世帯等調査によれば、母子家庭の増加傾向は顕著になり72万弱、中卒以上の子供を持つている母子世帯は37万弱であり、子供の数は55万2千人で、そのうち高校以上の子供は32万人になっております。人口比率から換算すると、高崎では前述の数の約五百分の一と考えて良いでしょう。これ等の教育環境劣化から、向学の徒の修学不能は、憲法や教育基本法の教育の機会均等を否定することになります。今年是世界青年年です。テーマ「参加・開発・平和」、スローガンは「はじめよう今、みつめよう未来」。自己を新たに確立した同窓会が心身共に健康な生徒を育成出来る事業とが奇妙に合致するところが面白い。私達の心の中は、青年の気概がいまだに残っているのかも知れない。翠巒育英会にも格別なる御支援をお願い申し上げます。

(51回・同窓会本部幹事 田中歯科医院)

先輩、頑張ってます

現役の抱負 その1



もう一つの壁を打ち破れ！

バレー部

本山 徹

去年の夏、新チームになってから早一〇カ月が過ぎ去った。これまで、秋季大会・新人大会・県総体と試合を重ねて来た。現在、三位を維持してはいるが、角度を変えて考えてみると万年三位という見方も出来る。

現在のバレー部には17名の部員がいて、顧問は遠間千明先生(保健体育科)と佐藤忠弘先生(理科)である。これまで、先生と生徒が一心一体になって練習に励んできた。暑い日も寒い日も。しかし、先にも述べたように万年三位で終わってしまっているのだ。それはなぜなのだろう。先輩の実績を見ると、優勝・準優勝と輝かしい成績を残している。自分達も先輩の伝統をつぶしたくないし、先輩達

に負けたくないのである。

三年生は、後公式戦がインターハイ予選しかない。この試合で決勝進出というもう一つ大きな壁を打ち破るためには、もう一つ上のレベルのところで練習に励んで行かねばならない。技術だけではなく精神的にも体力的にも、また勉強面や生活態度の面でも、今までとは違ったもう一つ上の次元で自分に厳しくして行かねばならない。甘えてはいけないのである。自分に妥協してしまえば、また同じことを繰り返してしまい少しも前進出来ないのだ。

今、我々17名は、インターハイ予選に向けて全開に燃えている。必ず壁を打ち破り、決勝に進出したい。しかし、これで満足してはいけない。また、次に待ち受けている優勝というより大きな壁に向かって努力して行かねばならない。そしてやるからには、ハンパしない目一杯頑張りたいと思う。高崎商・前橋商・桐生商をつぶし、必ず優勝し、高々バレー部の名を高く掲げたい。先輩方が味わってきた優勝という言葉では言い表せないあの瞬間を、部員17名と指導下さっている先生方と共に勝ち取りたいと思う。今後の我々の活躍を期待してほしい。蛇足だが、ベスト4の中で髪を伸ばしているのは高々だけである。そのところの伝統も守って行きたいと思っている。



インターハイに向けて

柔道部

鈴木 良地

今年の春、顧問が替りました。長い間、高々柔道部を支えて来られた江原隆起先生が、前橋工へ転任されたのです。そして、寺町良次先生(保健体育科)が、新しい顧問として来られました。――まずは、御報告までに……。

さて、今年度に入って柔道部は、毎日二時間という枠の中で集中してやる集約的な柔道をモットーとしています。また、今までもう一步のところで勝てなかった原因としては、体の大きさや力の差のハッデイが大きかったことがあるので、新たな練習のメニューとして、チューブ引き、練習後のサーキット・トレーニングや三人打ち込み、ウエイト・トレーニングを加えて筋力アップを図っています。近年それなりの人数が入っても一人か二人はやめて行ってしまうのですが、今年度は昨年比べて新入部員が多く入り今まで問題であった人数不足は解消されつつあります。柔道場等の設備も整い、新入生も沢山入ったせいか、練習も充実したものとなって来ました。

三年生の先輩方にとっては今度のインターハイが最後のチャンスになるので、今まで不本意な成績だった新人大会や県総体の反省のもとに部員一同一丸となって頑張っていきたいと思えます。また、高々柔道部のOBの方々が築いた伝統を、これからますますよいものとして後輩に

引き継ぐためにもそうしなければならぬと思います。

明日への飛躍を

サッカー部

町田 佳久

今年度のサッカー部は、近年まれに見る質・量共にそろった部員達で、県内優勝は確実と見られていたが、新人大会・県総体共PK戦で前橋商に敗れた。

その後、学校の教育指導方針に関連してか、部員が大幅に引退し選手層が極めて薄くなった。十分な練習も出来ず不安を残したままインターハイ県予選に臨んだのだが、この決勝に駒を進めていた前商と戦うことなく、準決勝で高崎商に敗れた。

この敗因は、レギュラーの負傷とその後を埋めるサブの力不足にあると思われる。主力選手に頼り過ぎる試合運びをしていたためか他のレギュラーがサブをうまく使いこなせず、またベンチの応援も心無しか高商に比べると弱かった。

サブの力不足は、いうまでもなく、我々の練習がうまくいかなかったことを表している。このことは、これからの練習に方向付けをしてくれたと思う。今後は、試合を想定した練習はもちろんのこと、誰が出てチーム全体の力が落ちることのない選手層の厚いチーム作りをして行きたい。

先輩、頑張ってます

現役の抱負 その 2



インターハイに懸ける 剣道部

伊藤 尚毅

剣道部の目標は、三位以内の成績を残すことです。

剣道場も新設され、新しい環境での第一歩となった訳ですが、新入部員が多いため思うように動けません。しかし、壁に掛かっている歴代の先生方の写真に見下ろされていると思うと、身が引き締まる思いがします。そんな先輩の中には定期的に練習に参加して下さる人もいて、私達の技術の向上に一役買って来てくれています。

私達は、「関東大会出場」を目標に練習に励んで来ましたが、後一步の所で実現とならず大変悔しい思いをしています。残るはインターハイのみで、是非とも三位以内に入りたいと部員一丸となって燃

えています。練習も以前より厳しさを増して充実したものにして行かなければなりません。耐え抜いて結果を満足行くようにしたいと思います。

最後に気掛かりなのは、後輩達のことです。私達が引退してすぐにある大会や前橋高との定期戦に、今の状態では好成績を挙げることは難かしいと思います。指導が足りなかったことを後悔していますが、後輩諸君には奮起して頑張ってもらいたいと思います。

我々の目指すもの ラグビー部

島田 明人

高校でラグビーをプレーするだれもが目指すもの、それは「花園」である。これを目指し、一年中汗水流しながら苦勞して最後に勝ち得るものである。三年間という短い間に、ラグビーを知らなかった者達が、高校ラグビーの頂点「花園」の土を踏もうと青春を懸ける。

今年のチームは、昨春秋結成以来、目標「花園」を掲げ、毎日活動を行って来た。結成後、最初の大会である新人大会では、不覚にも決勝で東京農大二高に、後半力不足のために優勝を持って行かれました。次に八人制大会においても、決勝で前橋商にゴール一本差で敗れた。

この二つの不覚のもとで春合宿を行った。合宿では、基本練習に重点を置き、毎日他校との練習試合を行ないチーム力向上に努めた。この後、県総体において、「花

園」への第一歩を達成した。準決勝で農大二高と対戦し、前半0-9と先行されたが、後半はFWの粘りにおいて16-9で逆転、優勝を収めた。

だが、この優勝は我々が目指すものの第一歩にしか過ぎないのであって、我々に対する価値は少ないように思われる。それは、我がラグビー部員は、他の部が春や夏で引退するのと違い、三年全員が秋の全国大会予選が終わるまで残るからである。我々は目標のために夏を乗り切り、その中から得た友情・闘志・忍耐力をもとに秋に向かう。

6月には関東大会があるが、今年は全国でも有数の強豪と対戦出来そうである。我々は、彼等達に真のフェアプレイでぶち当たり、彼等の持つ強さを勝つために何が必要かを学んで来たい。

応援部を見詰め直して 応援部

土屋 豊

現在の応援部は、三年次が4人、二年次が9人、一年次が2人です。夏の野球の応援や高々・前高定期戦に向けて練習に励んでおります。一応、私達三年次は引退ということですが、部長に部を任せることになったのですが、私達が後輩のために何を残すことが出来たのか疑問であります。

私は、一年間、部長を務めて来た訳ですが、部長らしいことは何も出来ず、ただ自分の無力さに気づくばかりでした。

リーダーの技術は教えられても、その内面の精神までは最後まで伝えることは出来ませんでした。もっとも、私にもそのような精神は理解されていなかったのですけれど。

私が応援部に入った理由は、ただ「カッコいいから」でした。外面的な格好よさ、例えば、太いズボン、長い学生服、高いえり。それらを本当にかっこいいものと思っていました。ところが、一年、二年とリーダー公開祭、炎天下のスタンドでの野球の応援、定期戦、真冬の花園でのラグビーの応援と経験して行く間に、本当のかっこよさ、内面的精神の格好よさに気付いたのでした。そしてそれは、そのまま高々生としての自覚につながるものでした。

ここで、私はもう一度、後輩達にあの部屋の片端で破れかかっている「応援團團則」を見直してもらいたいと思います。

- 一、暴力は一切排除す可し
- 一、團員は常に見守り隊としての誇りを持つ可し
- 一、團員は團長の元に團結す可し
- 一、團員は礼儀作法を重んず可し
- 一、團員は忍耐力責任感を養う可し
- 一、團員は常に真理追求の念を怠る可からず

今こそ、高々応援部三〇余年の伝統を見直す時だと思えます。



伝統の継承

硬式庭球部

山口 正仁

硬式庭球部が部として活動し始めて、早四年の年月がたちました。ようやく、部としての伝統・風格といったようなものが出来て来ました。そして昨年は、先輩方の努力や校長先生を始め諸先生の御協力のお陰で、コートが二面となりました。我々は、そういった支援に報いるためにも頑張らねばと一生懸命練習をして来ました。

新人大会においては、個人戦では余りふるいませんでしたが、団体戦では例年のごとく三位に入賞しました。この三位以上に入賞するというのは、もう一つの伝統となりました。それでも我々は、この成績には満足せず、「県総体優勝」を目標に新たなスタートを切りました。冬の間もほとんど毎日一生懸命練習しました。しかし結果は、健闘むなしくまたしても三位でした。優勝出来る力は十分持っていたので、とても残念でした。一方、個人戦では、シングルスがベスト16、ダブルスは昨年に続き優勝し二連覇をなしました。総合してみると、先輩達が築いて下さった伝統を受け継ぎ、後に伝えて行くことが出来ました。部長として責任を果たすことが出来、肩の荷がおりたような気持です。

テニスの上達は遅く、目立って見えるものはありません。当然のことですが、我々は、強くなるにはとにかく一生懸命

練習するしかないと思ってきました。振り返ってみると、練習だけはよくやったのではないかと思います。夏は日が暮れるまで、冬は市内のテニスクラブに協力してもらい照明の下で6時半頃までほとんど毎日練習しました。特に、冬場の6時半までの練習は、寒くてとても辛かったけれど、得るものは沢山ありました。

しかし、テニスは、メンタルなスポーツで、その上野球のように逆転サヨナラホームランというのがありません。だから、素晴らしい技を持ちながら、それを発揮することなく試合に負けることがあります。ちよつとした気の持ち方で、それまでの練習が水泡に帰してしまい兼ねない面を、テニスは持っています。だから、これからの練習では、技を磨くと共に精神力を養って行ってほしいと思っています。一・二年生の健闘を期待しています。

冬に向かって

スキー部

廣川 晶輝

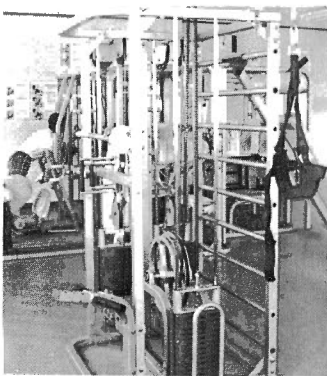
春・夏・秋の間は他の運動部の素晴らしい戦果が次々と報告されて来ます。しかしスキー部は、冬の間しか活動する事が出来ません。他の運動部が体力作りや調整の期間に当る時にスキー場に行き滑る訳です。この様にスキー部は、冬場しか活動出来なく、どこでも出来る訳ではなくスキー場でしか滑れないという他の運動部に比べ不利な点があります。ですから、その分冬場に力を尽そうと思うの

ですが、その冬場でも毎日雪の中で暮し毎日滑れる様な北毛の高校、例えば長野原高・利根商・武尊高などにはとても勝てません。ここにも、高々スキー部の不利な点があるのです。

しかし、同じ様に不利な状況に置かれていた前橋高はどうでしょうか。前高も毎日滑れるという訳ではないのに、高々よりもずっと成績が良いのです。地理的な関係で北部の高校に負けることには我慢がなりますが前高だけには負けたくありません。

では、同じ地理的な不利な点を背負って、前高はなぜ高々よりも強いのでしょうか。それは、スキーにとつてのシーズンオフの春・夏・秋の鍛え方の違いにあると思うのです。ですから、我々高々スキー部も前高その他の高校に負けまいようにシーズンオフのトレーニングを沢山こなし、高々の県高体連スキー部での地位の向上に努めたいと思います。

スキー部の力を発揮出来るのは、冬しありません。その冬になつて後悔しないよう、一年中スキーをはいたつもりで頑



トレーニング機器

張りたいと思います。

飛躍する卓球部

卓球部

柴崎 修

現在、卓球部は、三年6名・二年9名・一年11名という数の部員で活動しています。OBの方々が汗を流して頂いた練習場は第二体育館の建設に伴い現在はありませんが、私達は暗く狭い練習場から明るく広い第一体育館で毎日練習に励んでいます。また、かつて先輩方の上位進出の大きな壁となつておりました前橋商より井本嘉宣先生(社会科)がいらして、施設だけでなく総合的に充実して来ました。

しかし、ここ数年の卓球部の成績を振り返って見ますと、57年度県総体でのシングルス三位以来上位進出が出来ずに現在に至つています。今年も、春休に県外への遠征などを行つて来ましたが、先日行われました県総体におきましては二回戦で惜しくも準優勝の桐丘高に敗れてしまいました。

しかし、この様な成績も今年限りではないかと思われれます。というのは、今年の一年生は中学時代可成の成績を挙げた者が多くいるからです。ですから、今年よりは来年、来年よりは再来年と、高々卓球部は上昇の一途である事は確かであります。そして、団体ベスト8をまず第一の目標として、各部員の今後の飛躍を期待したいと思います。

先輩、頑張ってます

現役の抱負 その3



敗北から バスケット部

掛川 雅弘

昨年、国民体育大会が群馬県で開催された関係で、我々新チームが結成されてから既に一年が過ぎました。

それからの我々は、県強化大会優勝、西毛地区大会優勝、そして新春行なわれた新人大会兼全国選抜大会県予選は全勝優勝と勝ち進んで来ました。ところが、5月に行われた県総体・関東大会県予選では、準決勝で思いも寄らぬ敗北を喫してしまつたのです。この屈辱は、来たるインターハイ県予選で、是非晴らさねばならないのです。

そのためには、これからの一カ月間により一層厳しい練習に耐え、体力・技術を上向きさせるのは勿論のこと、精神的にもより強くなつて行かねばならないので

す。まず内容の充実を図り、且つその練習時間の豊富さで他校をしのぐことです。試合における好プレーの基盤のすべては、練習からのものであります。とにかく、残された一カ月間で自分の力を一〇〇％いや一二〇％出せる、そんな試合が出来るように頑張ります。

伝統ある高々バスケット部は、常にリーダーであることを要求され、そして絶対に優勝しなければなりません。今回は絶対に優勝あるのみと、部員一同心に誓っております。

何としてもインターハイに出場して、思う存分コートの中で暴れ回る。是非この決して遠くはない目標を取りこぼすこととなく、諸先輩の築き上げた輝かしい歴史を守るためにも、必勝、この言葉を胸に頑張つて行きます。

部員みんなで盛り上げる 陸 上 部

武井 務

高々陸上部の練習量は伝統的に少なく、今もその伝統を受け継いでいる訳ですが、成績はなかなかのものを残しています。昨年度は県総体四位、県学校対抗一部五位と立派なものでした。

今年是一年上の先輩がいなくなり、総合力の低下は否定出来ない状態でしたが、県総体において、校内マラソン大会三連覇の偉業を成し遂げた黒沢の五〇〇〇M優勝を始め数多くの六位以内入賞者を出し、総合でも五位と大健闘でした。

なぜ、他校と比較にならない少ない練習で、これ程の成績が挙げられるのか疑問に思われる方もいることでしょう。結論から先にいいますと、短時間に集中して行うこの練習方法が我々の体質にぴたりと合っているということなのです。今、一番何をやるべきか、何をやったら一番効果的かを考え、判断し、それを実行している訳です。ですから、その練習は、各部門別にかなり専門的なものといえます。よって、我々の練習は、量こそ少ないけれども、実質的には他校のそれと同じ、いやそれ以上の効果を秘めている訳です。

また、リラックスしたムードの中で皆で盛り上げて行く練習は、我が部独特のものといえます。三〇〇M全力疾走している友がいれば、皆で声を出し励まし合っている、四〇〇M全力疾走している友の姿を見て、共感を覚え自分もいっしょに走りたくなりダツシユの数を一本増やしてみたり。そんな中で部員は毎日、楽しく練習に打ち込んでいます。たまには、ジョークなども飛び交います。練習はあくまで厳肅な雰囲気の中で行うべきだと怒られてしまいうですが、こうした明るいムードの中で練習により、試合でもリラックスして競技出来、力以上のものを発揮することが出来ると思うのです。

僕等三年生はもうすぐ全員引退し、二年生に部の運営を任せる訳ですが、彼等はきつと今までのよい伝統を受け継ぎ部員全員でこの高々陸上部をますます盛り上げて行つてくれるに違いありません。

山岳部の活動

山 岳 部

清水 典克

現在の部員数は、三年5名・二年8名・一年2名である。毎年15名程入り次第に減つてしまふ一年生も今年は2名しか入らず、兩名共に三年間部活動を続けてもらいたいものだ。

普段の練習は、部山行の基礎体力作りを目的としたマラソン・おんぶなどである。

4月29日、毎年恒例である新人歓迎で裏妙義の丁須の頭に登った。コースは御岳・滝沢・レリーフの三コースから登り、レリーフにハプニングがあったものの全員無事下山できた。

県総体は5月11日〜13日に榛名山で行われたが、予選は昨年の記録は上回つたものの五〜六年前には及ばない一九位であった。一般の方も、一年生が一人出られなくなつたものの、体調を悪くした者もいなくよかつたと思う。

翠巒祭を終え、歩荷訓練を終えれば、夏合宿が待っている。ここ数年、計画通りにいかなかった夏合宿が多いので、今年には絶対成功させようと思つている。

今の一・二年生部員を考えると、個人山行の回数が少なくまだ山に慣れていないように思われる。もつと個人山行をして、山を楽しんではどうかと思う。

最後になるが、昨年発行出来なかつた「山小舎」を今年には是非発行したい。

堅固な意志を持って

水 泳 部

吉田 直文

昨年の夏には、県下一を誇るプールが完成し、以前にも増して能率よく幅広い練習が行えるようになり、我々はそんな中で夏に行われる二回の大会に向けて練習しています。

最近の高校水泳界は、シーズンに関係なく一年中泳いでいるスイミングスクールの選手が上位を独占するという状況です。水泳とは難しいスポーツで、やはり一年中泳いでいる選手と夏に泳ぐだけの我々との競技となると、我々が苦しい立場におかれることは否定出来ません。

そのような状況下で、ここ数年、高々の県総体での成績は下降気味です。一年は何とか三位に踏み留まったものの、昨年は四位とついに三位以内から脱落してしまつたのです。この成績は、我々にとつて屈辱の何ものでもありません。しかし、昨年県総体の後に行われた新人大会では、多くの種目で一位もしくは三位入賞を果たすなどよい成績を残すことが出来ました。

部員を個々に見ると、スイミングの選手に決して引けを取らない実力を持った者や、昨年から比べ記録の大幅な伸びが期待出来る者が数多く存在しています。昨年に比べて総合力が優つているとは決していえませんが、部員各々が持つている力を最大限発揮すれば三位以内への復帰は決して不可能ではないのです。

水泳は、練習・大会を問わず、常に自分との勝負です。その勝負に勝てれば自然に良い記録は後からついて来るものです。そう信じて、我々は、堅固な意志と忍耐力を持って、目標を目指し頑張りたいたいと思います。

ゼロからの出発

軟式庭球部

金井 雅之

現在、軟式庭球部は、部員28名である。そして、コート四面という県内では多分一番良い環境の中で活動していると思う。ほぼ毎日活動しているが、やはり他の高校から比べれば練習量は少ない。しかし、伝統校という立場から常に勝たねばならないと考えている。

ところが、新チーム結成後、新人大会において団体・初戦敗退という屈辱を味わつた。過去において常にベスト8に入つていた我が部としては、最大の屈辱であつた。この敗退について、自分を含めて部全体、部員一人一人の心の中に、「余裕で勝てるのではないか」という甘い考えがあつたに違ひはないと思う。そこで、その日から、「ゼロからの出発」を合言葉に皆で努力し数多くの苦難を乗り越えて来た。

そして、そのかいがあつてか、今年の県総体ではベスト4に入賞することが出来た。関東大会には団体では出場することが出来なかつたが、個人で三チームが出場することになつている。しかし最大

の目標は、インターハイ出場である。最後に、諸先輩が築き上げて来られた伝統を受け継ぎ、目標を達成するために努力して行こうと思つている。

勝利を目指して

野 球 部

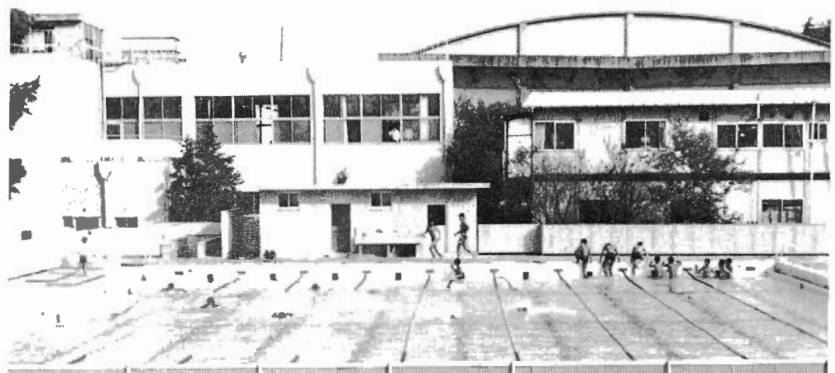
赤沢 正喜

新チームを結成して、秋季大会二回戦で前橋商と2-4で負けてしまい、春季大会は宿敵前橋高に2-6で負けてしまった。

何だかんだいっても、もう大会は一つしか残っていない。甲子園がかつた夏の県予選である。

しかし、なぜ大会で勝てないのであろうか。弱いといつてしまえばそれまでだが、決してそんなことはないと思う。僕自身の考えだが、自分達の力を十分に出していない。いや、高々らしい試合をしていないのではないだろうか。これまでの試合を見ても、完璧に力の差が出て負けたのではないのだ。

そりゃあ、高々の野球部は、他の高校より練習時間はかなり短い。そしてとび抜けて優れた選手もいない。しかしいつも、大会で上位の成績をおさめられるのは、選手たちのやる気と集中力である。ヒットの数が少なくても、少ないなりに点を取るのが高々の野球ではないであらうか。そのようなことが、二つの大会を経て、足りなかつたような気がする。野球部全体として、これまでの大会で



新築移転したプール

出せなかつた高々の野球の良い点を夏の大会（我々三年生には最後の大会）に全部出し尽したいと思つている。

これから、夏に向けて悔いのないよう、精一杯練習をし、チームのムードを盛り上げて、夏の大会に入りたいと思つている。

先輩達が築き上げてくれた伝統を崩さぬよう、我々高々野球部は最後の大会にかけている。

先輩、頑張ってます

現役の抱負 その4



一瞬の勝負に燃えて 空手道同好会

鹿野 和弘

我が空手道同好会は、結成して間も無い同好会であります。
私が二年になるまでは、コンクリートの廊下で練習に励んで来ました。冬場にはだしでの練習というものは、それは過酷な毎日でした。しかし、そんな練習の中で養われて来たものといえば、体力・技術だけではないそれ以外のものを無意識の内に自分自身で養っていた様な気がします。そして、先生方の御配慮によって、正門近くに堂々と構えている剣道場を頂いた時の我々の喜びといえ、それは他に形容する事の出来ない感激そのものであります。我々は、改めて、これからの伝統を築いて行く希望を見詰め練習して来た訳です。忙しい合間を縫って

顧問の鹿野福次先生(理科)が指導して下さっている時など、「ああ、空手をやっているんだな」としみじみ感じたものした。

その様な事を感じながらも、もう県総体が終わってしまいました。我々は団体組手にウエイトを置いていたので、一日目の団体型はいつもの練習の様に落ち着いて出来ましたが、結果は予選通過が出来ませんでした。我々は、県総体前、二度程五校位集まり練習試合をしていました。結果はとても良く、一度目は全勝した程でした。ところが、我々が一回戦で戦う前橋東高のレベルがどの程度のものなのか分りませんでした。そこで、一日目の個人組手の時に、選手の動きをよく見ておきました。この前東を破れば、後は桐生工や高崎高を破ってベスト4に入り関東大会へ行けるという自信を十分持つていました。二日目、試合の前に軽く汗を流し、「相手より先に飛びこめ。相手が攻めて来たら、かわして突け。フェイントをかける」という鹿野先生が御指導してくださったことを思い返しました。試合中は何も考えず頑張りました。結果は惜しくも破れてしまいました。この後、前東は準優勝しました。我々全員は、やはり伝統の差というものをあらゆる点において感じました。そして我々三年一同は、後輩の練習体系を確立し心身を鍛え、一瞬の勝負に全精神を燃やして、高々空手道の伝統を築いていく事を目標に、能率的・効果的な計画を立て顧問の指導方針を生かすべく取り組んで後悔のない部活を後輩にさせたいと思います。

この度の県総体も、鹿野先生から、試合に対する心構えは日常の練習時に培うもので技は思考の中で身につけいかに使うかは組手練習の中で習慣化するものと教えられていましたが、県総体の試合で実感しました。全空連の全国公認審判として団体等のハイレベルの試合審判をしている先生がおられる間に早く本校の実績を挙げたいと念願し、後輩に夢を託したいと思っております。

道場建設を目指して

弓道同好会

正木 匡彦

弓道同好会は、校内に道場がないというハンディキャップを背負いながらも、過去五年間の実績を認められて、今年の成績によっては部昇格もなり得るといふ所までたどり着いた。

ちなみに、過去五年間の実績は県大会個人準優勝三回、去年は念願のインターハイ出場を果たした。そして今年も、一年生が11名入会し、春季大会団体優勝・個人準優勝、県総体個人優勝という成績を出しているのだ、部昇格はほぼ確実となったと見てよいだろう。

同好会といっても、活動内容は運動部と同じく、原則として日曜・祭日を除いた毎日である。年間の活動予定は、4月春季大会、5月県総体、6月インターハイ県予選、8月関東選抜個人選手権県予選、10月秋季大会、11月新人大会などに出席し、夏休には練習試合や強化合



小体育館 (武道館)

宿なども予定している。また、昇段審査も年五回程あり、これも受ける事になっている。
さて、現在の部員数は二年3名に対して一年11名であり、二年1名に就いて一年4名を指導しなければならぬ。また、道場も一般の人との共有であるため、一年生への指導が十分に行き届かない現状である。その上、同好会であるため弓具類は弓道クラブの物を使っているため、痛みが激しく、古くなっても買い替えられない状態である。
この悪条件の中での活動であるが、来年度からは部として認められ部費も入る予定である。部に昇格した途端、成績が振わなくなるといふ事は絶対にあつてはならない。弓道部としての次の目標は、道場建設である。この目的を一刻も早く達成するために、一年生・二年生が一体となって頑張っていきたい。

高々・前高定期戦

第37回定期戦(昭和58年度)は
群馬国体開催の為に中止

翠巒体育会

会計報告

昭和58年度



第35回 得点集計表 (昭和56年度)

	一般対抗		部対抗	
	高々	前高	高々	前高
水泳	6	3	6	0
野球			0	6
ラグビー			6	0
バスケット	9	0	6	0
バレー	6	3	6	0
柔道			6	0
サッカー			6	0
玉入れ	6	3		
硬式庭球			6	0
駅伝	0	9		
剣道			0	6
陸上	4.5	4.5	6	0
軟式庭球	9	0	6	0
卓球	3	6	6	0
弓道			0	6
綱引	3	6		
体操			中止	中止
小計	46.5	34.5	60	18
総計	高々	106.5	前高	52.5

第36回 得点集計表 (昭和57年度)

	一般対抗		部対抗	
	高々	前高	高々	前高
水泳	3	6		
野球			0	6
ラグビー			6	0
バスケット	6	3	0	6
バレー	5	4	6	0
柔道			6	0
サッカー			6	0
玉入れ	9	0		
硬式庭球			6	0
駅伝	1.5	7.5		
剣道			6	0
陸上	3	6	6	0
軟式庭球	3	6	6	0
卓球	2	7	6	0
弓道			0	6
綱引	0	9		
体操			中止	中止
小計	32.5	48.5	54	18
総計	高々	86.5	前高	66.5

(高々19勝13敗3引分1中止)

収入

摘要	金額(円)	備考
繰越金	135,593	
年会費	250,000	25,000×10部
総会費	87,500	3,500×25名
助成金	200,000	同窓会・ラグビー部より
雑収入	39,524	
計	712,617	

支出

摘要	金額(円)	備考
総会費	112,500	
別費	90,000	関東・全国大会出場9部
マラソン大会補助費	10,000	トロフィー
運動部顧問会議費	100,000	
理事・役員会費	50,885	
慶弔費	22,400	
計	385,785	

差引残高 326,832円

会計 阿久沢 茂
 監査 東 秀和 (69回・サッカー部)
 監査 大須賀 正臣 (51回・応援部)
 (57回・陸上部)

翠巒体育会役員名簿

(昭六〇・三・一五)

理事										顧問				監査		副会長		会長																																																									
剣道	柔道	水泳	サッカー	ラグビー	バレー	バスケット	軟式庭球	卓球	陸上	岡田	清水	廣田	東	秋池	山口	設楽	岩田	国峯																																																									
横田	小見	石井	桜井	秋池	湯浅	小此	佐藤	田中	国峯	木村	設楽	大塚	織	片野	友松	岩田	塚	反町	塚	勝	山口	深沢	竹内	大須	大田	岡田	清水	廣田	東	秋池	山口	設楽	岩田	国峯																																									
茂	章	清	一	宗	一郎	義夫	勝	彰	善次郎	嘉男	嘉男	八郎	恒	昭	三	武	定	夫	章	哲	真	正	昇	成	正臣	保	由	貞	四	秀	一郎	正	武	善																																									
55	66	57	56	65	56	56	58	56	50	59	57	51	62	50	49	61	53	50	58	55	52	58	57	59	57	52	30	64	51	69	65	58	57	53	50																																								
										住所								電話		学校側顧問																																																							
上野 臣吾										滝沢 敦雄								加藤 武司		井本 嘉宣		徳安 茂修		兒島 敏男		清水 道弘		茂木 栄一		高橋 栄一		川嶋 尚武		田多 澄男		塚田 元樹		樋口 開次		中原 鹿止		森 慶寿		波戸 研二		志村 甲子郎		矢島 哲雄		原田 光男		吉野 潤		服部 勉		金子 孝一		今井 保男		樋口 開次		寺町 良次		岡田 豊治		上野 臣吾		部運 校長		教頭 小林 再喜		運動 中原 鹿止		学校側顧問	

編集後記



七号から八号への道程は思いの外長く、背景に私の高崎から富岡への転勤があるように気が病んでいましたが、万場への転勤を機に八号発行の運びとなりほっとしているところです。編集・印刷には、丸山功一君(60回・応援部)・大崎哲朗君(77回・サッカー部)という高崎印刷業界の若い人材が積極的に取り組んでくれました。後継者を得て私は編集部を引退出来そうですし、印刷費は同窓会の御

事務局	編集部	弓道	スキー	空手道	硬式庭球	応援	野球	山岳	氏名
中原射鹿止 吉野 光男	丸山 功一 大崎 哲朗				高野 政博	東 秀和 下田 茂夫	若山 享 藤川 洋	森田 忠義 大山 吉造	酒井 征哉
69 60	55 77	60 50			56 51 50	58 51 44 59	62 55 58		吉野 宏一 清水 正爾 酒井 征哉
住所									電話
学校側顧問									今井 俊治 斎藤 基弘 樋口 久隆 山口 富士生 田端 信久 石沢 邦彦 池之上 昭義 飯野 邦彦 鹿野 福次 西須 秀夫 山口 富士生 染谷 秀雄 五十嵐 誠一 真砂 芳夫 山本 昭弘 山口 富士生 中島 国雄 鹿野 福次

配慮等で好転した模様で、「翠巒体育」の将来は明るいものとなり喜んでおります。(田中 彰)

翠巒体育 第八号
昭和60年5月24日発行
翠巒体育会事務局
〒三七〇高崎市八千代町二四一
群馬県立高崎高等学校内
電話 〇二七三(二四)〇〇七四
印刷 (有)オーサキ